



特別支援教育における魅力ある授業づくり実践編

知的障害特別支援学校小学部における自立活動の指導

— 時間における指導の取組 —

実践のポイント

- 時間における指導に取り組んでいます。
自立活動の時間を教育課程に取り込み、指導を行っています。
- 外部の専門家の指導を受け、指導に取り組んでいます。
理学療法士（PT）や作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）からアドバイスをもらい、指導内容の検討を行っています。

授業実践について

1 自立活動（時間の指導）

- 時間における指導の押さえ
各学年で個々の実態を捉え、目標設定を行っている。個に応じた指導を行う上で、課題によってはグルーピングを行っている。
- 指導時間
低学年・・・毎週金曜日 10:20～11:00 中・高学年・・・毎週木曜日 13:35～14:15 に実施している。

2 外部の専門家からのアドバイス

多様な人材活用学習支援事業を活用して、外部から理学療法士（PT）や作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）に児童生徒への支援の仕方等について助言を受けながら、自立活動の時間だけではなく、体育や国語・算数など学校生活全般でできる活動に取り組んでいます。

理学療法士や作業療法士が児童の体の使い方を見て、うまく使えていない部位のアセスメントを行います。また、休み時間や日常生活の中でできそうな活動についてアドバイスをします。教員はこれらのアドバイスや支援方法を記録にまとめ、学年内で共通理解を図ります。

そして、個別の教育支援計画、指導計画の内容を照らし合わせて、指導内容を決定していきます。

3 成果

- 時間における指導の成果
年間を通して、時間における指導でこそ取り組める小集団でのきめ細かい指導により、児童の体の使い方やバランス感などの定着が見られた。
- 外部の専門家からのアドバイス
教員の専門性も高まり、他の児童の指導へと生かすこともできるようになってきた。

4 課題と今後の取組

- 自立活動は時間における指導だけでなく、学校生活全般を通して指導されるものであることを念頭におき、時間における指導と学校生活全般における指導の一貫性を深める。
- 教師や家庭、専門家が支援を共有できるようにするため、有効な支援方法（専門家からのアドバイスを含む）が分かる個別の教育支援計画や記録シートの改善が必要である。

5 指導の実践例

単元名「どっしんどっしんあるいてみよう！」

(1) 対象児童の実態

担任のアセスメント

小学部1年、自閉症スペクトラム、太田ステージI-2。高いところが好きでよじ登ることを繰り返したり、移動速度をコントロールすることが難しいため、絶えず小走りで移動したりしている。

作業療法士（OT）のアセスメント

・全身の筋力が未発達であり、体がふらふらしてしまう。
・飛び出しや歩かずに走るといった行動は、筋力が自分の動く速さをコントロールできていないことから生じるものである。

作業療法士（OT）のアドバイス

- 足の裏に体重が乗っている状態を経験することで、足の裏を使えるようにしたい。
- 下半身と腰を使って体の動く速度をコントロールする力を伸ばしたい。

課題

- ・体幹を保持して、身体の動きを調整する。
- ・足の裏全体を床に付ける。

(2) 目標

- 骨盤から膝にかけて力を入れてバランスを取ることができる。
 - 膝立ち位で腕を上げることによって、腹筋と背筋でバランスをとることができる。
 - 足の裏を床に付け、踏ん張ることができる。
 - 片足ずつ体重移動を行うことができる。
- 〔 5 身体の動き（1）姿勢と運動・動作の基本的な技能に関すること
（4）身体の移動に関すること 〕

(3) 指導

- 教師がでん部を支えることで、膝立ちの姿勢を保持する。
次に、手を伸ばすと届くところにもものをおくことで、自発的に手を動かすことができる。
- 立位をしている児童の腰を支え、腰骨に垂直に圧を加え、足の裏に体重の負荷が掛かる経験を積み重ねる。



(4) 成果

- 膝立ち位が安定してきた。
以前は、教師がでん部、骨盤、背部を支える必要があったが、現在では、軽くでん部を支えるだけで姿勢を保持できるようになった。
- 動作のコントロールができるようになってきた。
自立活動での「飛び石を移動する活動」では、片足ずつ体重移動する姿が見られるようになった。また、体幹の保持ができるようになり、歩く速さの調整ができるようになった。
- 学校生活全般においても落ち着いて取り組めるようになってきている。